

道徳だより

テーマ：小中合同夏季研修講座レポート



令和7年8月
京都市立道徳教育研究会
広報部
(第4号)

実践発表① 「子どもを中心に考え議論できる、心と心をつなぐ道徳授業」

開晴小中学校 教諭 上田 紗和子先生（シニア・マイスター）

今回の実践発表のために事前アンケートにて日頃、道徳科の授業において考え悩んでいることを調査していただきました。「国語の読み取りのようになる」「発問の難しさ」などの意見が多く寄せられたようです。そこで今回は、上田教諭より、教師も子ども達とともに道徳科の授業を楽しめるような授業の工夫について自校の実践をもとに発表していただきました。

授業前の準備・確認

ねらいの設定

学習指導要領の確認

基本的に立ち返って、しっかりと読み込んでねらいを定めることは授業の軸がぶれないので、授業づくりにおいてとても大切ですね。

発問の準備

問い合わせし、ゆさぶりを考えておく

「それ、どういうこと?」「もっと詳しく教えて。」と問い合わせしたり、「逆の立場なら?」「周りの人はどう思っていた?」などとゆさぶったりする。意図をもって適切な場面で行うと考えや議論がより深いものになり、ねらいに迫っていけますね。

実態把握

何が生徒に響くのか考える

教材研究をする時に頭に浮かぶあの子には、一体この授業をすることで何が響くだろうか...。子ども達の日頃の言動、それぞれの抱える事情や悩みを把握しているからこそ、教材研究する際に浮かぶ子ども達の顔。授業を受ける相手により響く、届く「何か」を考えておくのは重要です。

実践発表② 「児童の主体性を核とし、学校教育全体で取り組む道徳教育」
音羽小学校 教諭 堀江 一成先生

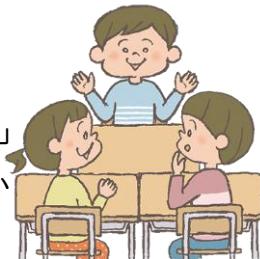
今回は、前任校養徳小学校での実践をもとに子どもが主体となる道徳科について発表していただきました。

子どもが主体となる道徳科への転換

変化の大きい社会を生きていく子ども達。与えられるだけではなく、道徳的課題に自ら気付き、考える力を高められるようにするという目標をたてて、進めてこられたそうです。では、どうやって…？

そこには、教材文の読み方や問い合わせの作り方に工夫がありました。

それは、教材文の中の「心にのこったところ」「みんなで考えたいところ」に線を引き、自分達の感想や疑問から、めあてに向かって子どもたちが問い合わせをつくるというものです。



学年の実態に応じて取り組み方にはそれぞれの工夫がありますが、こうした教材文の読み方や問い合わせの作り方によって、教材文から道徳的課題を見つける力や個々の課題意識から問い合わせを作る力を高められてきたのですね。

子どもがつくった問い合わせから深まる道徳科の授業。考え方、生き生きと議論し合う子ども達の姿が浮かんできますね。

講演 「『特別の教科道徳』における質の高い学習指導と評価
～「指導と評価の一体化」を意識した主体的な学びへの道徳科授業改善～」

京都産業大学現代社会学部現代社会学科 教授 柴原 弘志先生

質の高い道徳科の授業とは何か。本当に熱く熱くご講演いただきました。指導と評価の一体化。授業中、ワークシート等からしっかり見取って評価し言葉を掛けていく。子ども達にその場でフィードバックすることが大切です。



最後に

今回も夏休み期間でしたが、多くの方々にご参加いただきました。この研修講座に参集された方は、道徳科に熱い「仲間」だと思います。学校や環境が違っても、日々子ども達のために葛藤している仲間がいること、今回の研修で学んだことを糧にして、大切な京都市の子ども達の過去、現在、未来において我々の道徳科の授業から、何か一つでもよりよく生きる力やそのための気付きが生まれるように明日からの実践につなげていけるとよいですね。

【文責 三橋 柚里（九条塔南小学校）】